

赤十字NEWS

March 2016 Vol.910
http://www.jrc.or.jp



日本赤十字社
人間を救うのは、人間だ。Our world. Your move.

赤十字新聞 編集・発行/日本赤十字社 企画広報室 〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 TEL:03-3438-1311 一部20円 赤十字新聞の購読料は、社費に含まれています。



私たちは、忘れない。



それぞれの空のした、
ここに刻まれた「あの日」。

遠くにいても、近くにいても、
祈りに距離はなかった。

誰かを思い、誰かに寄り添い、
誰かの支えになりたいと願ったところは、
いまもずっと生きている。

人には人を思う力がある。
人には人を救う力がある。

明日のために、
明日を生きるみんなのために。
私たちは、忘れない。

2011年3月11日、建物のほとんどが津波に流された海沿いの石巻市南浜町。松と祠(ほくら)が残る善海田稲荷神社。石巻市内で亡くなった方は3547人にのぼり、今もなお428人が行方不明のまま。(平成28年1月末現在)

CONTENTS

TOPICS 2

- 被災地と向き合い続ける
NHKディレクター
佐野広記さん
- 愛の献血車「宝くじ号」贈呈式
「私たちは、忘れない。」
未来につなげる
復興支援プロジェクト
- 健康豆知識 大人のアトピー

TOPICS 3

- 全国から続々
被災地応援メッセージ

SPECIAL 4 5

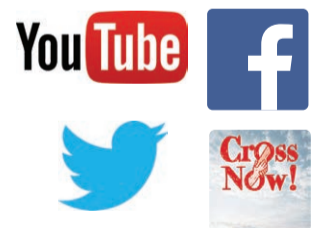
- 東日本大震災から5年
もう一度心に刻みたい
あの日の記憶、そして今

AREA NEWS 6 7

- 広島・北海道・新潟・神奈川・愛媛・徳島
東京・兵庫・山口・栃木・三重・京都・福島
- 日赤×ANA
東日本大震災復興支援事業
バレンタイン特別企画
健康教室と手作りチョコで
笑顔の交流
- 常任理事会開催報告
Voice&プレゼント

WORLD 8

- 中東3カ年計画
人びとに笑顔を取り戻す
支援をいま
- コラム 被爆70年
守るべきいのちと尊厳(最終回)



今月の出会い



ラジオパーソナリティ
RIOさん

人それぞれ果たせる役割があるはず

被災者へのインタビュー記録を元に災害時の避難生活などを追体験する読み物「災害エスノグラフィー」を、都内で2月14日に開かれた防災イベントで朗読したRIOさん。「災害時には地域の協力が不可欠だと分かりました。普段から近所の方とのあいさつなどを大切にしていきたいですね」と参加者に呼び掛けました。

阪神・淡路大震災の時はワーキングホリデーでオーストラリアに滞在中。被災者のために行動する機会がありませんでした。それだけに東日本大震災では、ラジオ番組内に被災地情報や寄付を募るコーナーを設けるなど、自分なりの支援活動に力が入ったといいます。「ラジオで話す機会をいただいている人間として、しっかりし

たメッセージを伝えていきたいと思いました」と振り返ります。

防災イベントの前には、日本赤十字社本社(東京・港区)の資料室「情報プラザ」を見学。世界と日本の赤十字活動やその歴史に触れ、「人のために世界中で活動する赤十字ってスゴイ!」とストレートに驚いたそうです。「でも、誰にだって果たせる役割があるはず。ラジオでも番組を通じて人を勇気づけることができる。私は私の現場でこれからも頑張っていきます」

PROFILE

1974年三重県生まれ。献血推進プロジェクト「LOVE in Action」にDJとして協力し、自らも献血に!現在は飲酒運転撲滅を訴える「STOP! DRUNK DRIVING PROJECT」(FM OSAKA 土曜19:30~20:00)に出演中。画家RIO UMEZAWAとして参加するグループ展(渋谷「SOCIAL TOKYO GALLERY」3月11~21日)では、被災者を思いデザインした手拭いを販売し、収益を義援金とする予定。

「あの現場を取材した人間の責任として、被災地と向き合い続けたい」

NHK報道局ディレクター 佐野広記さん

「被災者や被災地のいまを語るというのは、単純な話ではないと思うんです」。

東日本大震災の発生翌日に被災地に入り、石巻赤十字病院の奮闘を取材(※)した経験を持つNHK報道局の佐野広記さん。その後、足運び、被災者の声に耳を傾けてきました。

「大勢の方とお会いしてきましたが、被災者として一くりに捉えることはできません。話を聞くたびに、どう伝えるかの難しさを痛感します」

「被災地で起きていることすべてがここに集約されているのではないかとさえ感じた現場が、石巻赤十字病院でした。記録し、伝えていくというテレビの役割を私自身が初めて実感できた取材でした」と当時を振り返ります。

「被災地から時間がたつにつれ、被災者の生活も落ち着き始め、一見、元気を取り戻したかに見える方が増えてきました。ところが最近、「急につらくなってきた」「死ぬかと思った」という連絡が相次いでいるのです」。

「生き残った被災者の多くも、肉親や友人を亡くし、深い悲しみを抱えています。『頑張つて生きよう』と自分を奮い立たせてきた反動が出てきているのかもしれない」

頑張りの反動に苦しむ被災者も

「5年前の石巻赤十字病院。取材にあたり病院広報や現場医師の口から出たのは『自由に撮っていたらいい結構です。現状をありのままに伝えてください』という思いがけない言葉でした。そして、最初に案内されたのが黒のトリアージエリア、遺体安置所でした」。

「衝撃でした。この亡くなられた方たちの無念を伝えなければという思いです。とやってきたような気がしています。5年がたち、視聴者の関心も薄れてきていますが、伝えなければならぬ話がたくさんある。あのときの現場を取材させていただいた人間の責任として、これからも被災地に向き合っていきたいと思っています」

震災を取材した人間の責任として



震災で亡くなった方の姿を遺族が見る、という不思議な体験談を取り上げ話題となったNHKスペシャル「亡き人との“再会”～被災地 三度目の夏に～」(平成25年放送)も佐野さんの取材。「亡くなった人に再び会えた」ということの意味ではなく、それらの体験を被災者の方が大切にしており、止まっていた時間が動き出すきっかけにもなっているという事実を伝えたかった」



3月12日、震災2日目の石巻赤十字病院。玄関前でのトリアージ

※3月1日及び取材の記録は3回の震災特集を経て、NHKスペシャル「果てなき苦闘 巨大津波 医師たちの記録」として震災から4カ月後の7月に放送された。大きな反響を呼びました。

「私たちは、忘れない。」

未来につなげる復興支援プロジェクト

東日本大震災から5年がたち、震災の記憶さえもが薄れつつある中、日本赤十字社は「私たちは、忘れない。」を統一テーマに掲げる全国的なプロジェクトを3月まで展開中です。日赤職員はもとより、奉仕団やボランティア、青少年赤十字、企業などと一緒に取り組み、記録。3月11日には全国の赤十字施設で職員が救護服で業務に臨み、救護団体の職員としての自覚を再認識していきます。

また各都道府県支部では、炊き出しなど災害時の支援活動を体験したり、防災に関する風化を防ぐとともに、助け合いと防災意識を醸成。復興への想いを未来へとつなげていきます。

期間中は3・11のシンボルマークがデザインされたプロジェクトのバッジを着用したり、イベント時にステッカーを貼って活動をアピール。3月11日には全国の赤十字施設で職員が救護服で業務に臨み、救護団体の職員としての自覚を再認識していきます。

また各都道府県支部では、炊き出しなど災害時の支援活動を体験したり、防災に関する



兵庫県で1月に実施した震災復興・防災イベントでは、豚汁の炊き出しも。3月末まで全国各都道府県で様々なイベントが行われます

「私たちは、忘れない。」のWEBサイトでは、被災地の現状を伝えるインタビューや動画、企業・団体からのメッセージなどを紹介中です

wasurenai.jrc.or.jp



参加企業は、全日本空輸株式会社 株式会社伊藤園、タリスコーヒージャパン株式会社、総合警備保障株式会社、株式会社アクトイオ、株式会社第一興商、株式会社ソラシドエア、飛鳥交通グループ 株式会社ウェザーニューズ、東京トヨペット株式会社、劇団四季、ハウス食品グループ、加森観光株式会社、ミツウロコパレット、株式会社サカイ引越センターなど(2月23日現在)

愛の献血車「宝くじ号」

日本宝くじ協会から7台

宝くじの収益金をもとに日本赤十字社に毎年寄贈されている移動採血車(献血バス)の「宝くじ号」。今年も一般財団法人日本宝くじ協会から7台が寄贈され、2月5日に日赤本社(東京・港区)で寄贈式が行われました。

昭和42年から続く「宝くじ号」の寄贈は、今年で471台に。今回寄贈された7台は、北海道など全国7つの道県の血液センターに



地域の献血を支える献血バスの約半分が「宝くじ号」。今日も皆さんの街で活躍中です

寄贈式では、日本宝くじ協会の横山洋吉理事長から日赤の大塚義治副社長に贈呈状と車両のキーが手渡されました。横山理事長から

7台は、北海道など全国7つの道県の血液センターに活用される予定です。

配備され、イベント会場や駅前、学校などの献血会場に活用される予定です。

知って良かった! 日赤のドクター&ナースが教える健康豆知識

② 大人の atopie 性皮膚炎 予防と治療効果を高める規則正しい生活 姫路赤十字病院 山田琢皮膚科部長

アレルギー体質(素因)や皮膚のバリア障害*を背景に持つ方の慢性的で治りにくい湿疹が atopie 性皮膚炎です。患部はひざ・ひじの内側や脇の下など汗をかきやすく、汚れがたまる部位、皮膚が弱い場所。顔面に症状がでる人もいます。患部がじゅくじゅくとただれる乳幼児の atopie と違い、大人は乾燥して粉をふいたり、皮膚が硬くなったり、黒ずんだりするのが特徴で、強いかゆみを伴います。

成人型の atopie はダニやカビ、ほこりなど環境アレルゲンが引き金になるケースが多いので、予防や治療には部屋のダニやハウスダストの対策

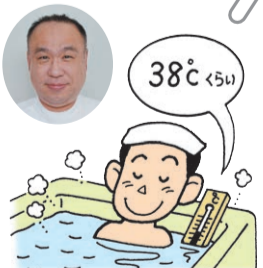
など環境改善が大切。また不規則な生活、就職・転職・転居など環境の変化やストレスも atopie 発症や悪化の原因になるので注意が必要です。

日常生活では、入浴を欠かさず皮膚を清潔に保つことを心掛けてください。入浴後に保湿成分入りのクリームも忘れないようにしましょう。逆に避けたいのがお酒とタバコです。お酒で体がほてるかゆみが増しますし、気分が緩くなるので、かいてはいけない患部をかいてしまいがち。タバコも人によってはかゆみ悪化の原因になります。

治療には、ステロイドや非ステロイド、免疫抑制剤の塗り薬と、かゆみを抑える抗ヒスタミン剤

や抗アレルギー剤が使われます。症状が重い方には免疫抑制剤の飲み薬が処方されるケースもあります。ステロイドの塗り薬を長期間使用し続けた場合、皮膚が薄くなったり、患部が多毛状態になるなどの副作用があります。また、免疫抑制剤にも副作用が確認されています。薬はこうした副作用を踏まえた上で、症状と部位ごとに処方されます。患部が広がったり、移ったりした場合でも、勝手な判断で薬を塗るのは危険です。必ず医師の指示を仰ぐようにしてください。

*水分を保持したり、異物の侵入を防ぐ皮膚のバリア機能に発生する障害



▲熱い湯はかゆみを増幅させます。お風呂は38℃前後の低めの温度で入りましょう

姫路赤十字病院
〒670-8540 兵庫県姫路市
下手野1丁目12番1号
TEL 079-294-2251

「赤十字NEWS」読者も 参加企業も「忘れない。」

全国から続々被災地応援メッセージ

「被災された方へのメッセージを」の呼び掛け(赤十字NEWS2月号)に読者の皆さまからたくさんの方が届いています。「私たちは、忘れない。」プロジェクトの参加企業の皆さまからも、バッジやポスターなどの活用とともに復興支援に向けた決意や被災地への応援をいただきました。ありがとうございます。私たち日本赤十字社は、これらの声を被災地にお届けするとともに、しっかりと胸に刻み、これからの復興支援に取り組んでまいります。



「私たちは、忘れない。」プロジェクトのバッジ

まだまだご苦労が多いと思います。毎日寒いのでお体お大事にしてください。
森田真美さん(東京都昭島市)

東日本大震災から5年になろうとしています。福島県では今なお約10万人の方が県内外に避難を余儀なくされています。さらに、東京電力福島第一原発事故で避難指示区域の方々は帰ることもできないのです。早く元の生活に戻れるようにしていただきたいと思います。
鈴木ヒロアキさん(福島県河沼郡津坂下町)

震災当時、震源地から遠い場所にいた私はいつもと変わらぬ日常を過ごしていた。そんな私が、被災された方がたのためにできることはあるのだろうか。まずは、この震災の事実を受けとめ、心に刻む。そして、毎日何となく生きていくことに感謝する。これら実践からはじめてみようと思う。
宮浦睦海さん(大阪府吹田市)

国内線、国際線機内で3.11シンボルマーク入りのオリジナル紙コップ配布

全日本空輸株式会社

この5年間、地域の方がたとの交流を大切にしながら、復興支援活動に取り組んできました。これからも地域社会の課題を共に考え、魅力ある東北「まち・ひと・しごと」づくりを支援してまいります。



全国へ「忘れない。」を届けたい

株式会社 伊藤園 広域法人営業本部 一部 第四課 グループリーダー 高見啓さん

今回のプロジェクトでは、寄付型自動販売機へのポスター掲示や全国のポリングカーにステッカーを貼っての営業活動を行います。ポスターやステッカーを通じて「忘れない」の気持ちが広がっていただければ幸いです。

こうしたプロジェクトを日赤と一緒にすすめていけることは、被災地支援を継続することの大切さを再認識するきっかけとなります。

東日本大震災では大勢の方が被災されました。そうした被災者の方を支えたいと願う方も大勢います。「1人じゃないですよ」という気持ちが、今回のプロジェクトを通して被災地に届くと信じています。



5500名の社員がバッジを着用

株式会社サカイ引越センター

ものを運ぶだけではない。ベテランの社員はそう言います。「その家に詰まった思い出や家族の気持ちも運ぶ」。我々のサービスが少しでも復興のお役に立てるよう、これからも被災地を応援してまいります。



社員のバッジ着用&営業車両へのステッカー貼付

株式会社アクティオ(建設機械レンタル業)

東日本大震災では営業所や工場が被害を受けましたが、全国ネットワークを駆使し、いち早く重機や発電機などを被災地に届けました。この経験を忘れず、今後もレンタルを通じて被災地の復興に尽力致します。



業務用バイクへステッカー貼付&事業所内にポスター掲示

総合警備保障株式会社(ALSOK)

震災直後から、支援物資の供給やボランティア、二次被害防止へATMの現金回収などを実施してきました。生活安全産業の使命の下、これからも警戒を怠ることなく、被災地の復興に向け取り組んでまいります。



客室乗務員がバッジを胸に運航

株式会社ソラシドエア

私たちがなすべきこと、私たちがだからこそできることに真摯に取り組みながら、安全運航してブランドコンセプト「空から笑顔の種をまく。」の実現に、社員一同これからも取り組んでまいります。



社員全員に「忘れない。」を呼びかけ

(ポスター、ステッカーなどを社内に貼り出し周知)

ハウス食品グループ本社株式会社 コーポレートコミュニケーション本部 広報・IR部 広報課兼渉外課 課長 堀井志郎さん

震災当時、私は仙台で暮らしていました。仙台市内も震度7。かつて経験したことのない揺れが私達を襲いました。あれから5年、傷が癒えない中、復興を目指される被災地の姿に心を打たれます。

震災後、私たち家族は転勤で札幌に引っ越しました。小4だった娘が社会科見学で防災センターに行った時のことです。地震体験コーナーでほかの子どもたちがはしゃぐ中、震災を小1で経験した娘はその場にしゃがみ込み、泣き出してしまいました。その様子を見て、全員が真剣に地震体験に取り組んだと聞いています。娘は泣くことで地震の怖さを伝えましたが、私たちも社員全員で「忘れない。」を呼び掛けていきます。私たちは決してあの日のことを忘れません。



減災社会の実現へ、一人ひとりができることを

株式会社ウェザーニューズ 防災気象コンテンツサービスグループリーダー 中神武志さん



ウェザーニューズは、震災直後より「特設WEBサイト」の設置など、いのちを守るための情報・コンテンツを発信。その後もTSUNAMIリーダーの各地への整備など、減災を目指す活動を続けています。減災情報は皆で参加し、共有することが大切です。日赤など諸団体や自治体との連携で、情報活用による「減災プラットフォーム」を実現させたいと考えています。

私自身も被災地で活動した際、被災者が懸命に生きている現実を目の当たりにし、一人ひとりが被災地のためにできることに向き合う必要性を肌で感じました。これからも減災社会の実現へ、皆さんと一緒に頑張っていきます！

被災された方の一日も早い笑顔を望んでやみません。何のお役にもたない私ですが、毎日みんなが平和に暮らせますように祈っています。
錦見真知子さん(愛知県長久手市)

京都の人も、いや日本中が支援していますよ。お互いさます。困ったときは。。
山田一正さん(京都府京都市)

2011年3月11日以降、毎年私たちはチャリティーバザーや街頭募金で得た貴重な現金を全額東日本大震災の被災者義援金として寄付させていただいております。今後も寄付金という形で応援させていただきますたく存じますので、どうか生活再建に頑張ってください。けっして3.11を忘れないでほしいと思います。けっして3.11を忘れないでほしいと思います。けっして3.11を忘れないでほしいと思います。
山田智善さん(北海道旭川市)

「忘れない。」を全国の防災に生かす取り組みを

日本赤十字社 救護・福祉部 西島秀一郎長



被災地を訪れた経験や被災者から聞いた話を記憶の中にとどめるだけでなく、それぞれの人が自分たちの暮らす地域の街づくりや防災などに生かしていくことが、何より大切だと感じています。では具体的には何をすべきなのか? そのヒントは被災地にあります。例えば高齢化や過疎の問題。被災地でも以前から課題として指摘されてきましたが、震災で事態は一気に加速。多くの被災地がこの課題に直面し、苦しんでいます。被災地の今を考えることは、私たちの地域の未来を考えることにほかなりません。

一方、震災ではボランティアやNPO(非営利団体)を含む幅広い団体・個人が連携・協働する大切さが再認識されました。でも、災害が発生してから手をつなぐの

では不十分。いま国は、少子高齢社会の対応として、医療や介護、行政、住民が連携する「地域包括ケアシステム」の構築を進めています。日常生活の中での協働は災害時の助け合いにも生かされるはず。日本赤十字社は防災教育の普及を推進するとともに、医療サービスの提供や、ボランティア活動の支援などを通じて地域を支える役割をこれまで以上に発揮していかなければなりません。

こうした取り組みを通じて、防災を考え、災害に強い地域をつくるのが、本当の意味での「忘れない。」につながり、また被災者の思いに寄り添うことになると信じています。

東日本大震災復興支援事業

世界からの応援を 被災者支援につないだ5年間

「被災者の力になりたい」—東日本大震災では世界中からこうした温かな思いが日本に寄せられました。各国の赤十字を通じて日本赤十字社に寄せられた救援金は総額1000億円以上。日赤は、6つの分野でかつてない規模の様々な支援活動を実施してきました。詳しくは日赤ホームページ (<http://www.jrc.or.jp/>) をご覧ください。

生活再建



生活家電セットの寄贈 13万3183世帯

仮設住宅入居世帯を中心に生活家電セット(テレビ、冷蔵庫、洗濯機、炊飯器、電子レンジ、電気ポット)を各世帯に届けました。(そのほか健康維持のためのノルディックウォーキング、浪江町民健康調査などを実施)

福祉サービス



社会福祉施設への介護士の派遣 4カ所67人

被災地の福祉施設では、多くの介護職員が自宅を流されるなど被災しました。こうした介護職員を支援し、福祉サービスの質を維持するため、日赤の社会福祉施設から約2カ月間にわたり介護士を派遣しました。(そのほか介護用ベッド、福祉車両の寄贈などを実施)

教育支援



サマーキャンプin北海道 20回5788人

震災で心に大きな影響を受けた子どもたちに精神的安定と健全な成長を促す機会を提供するため、北海道の雄大な自然の中で行われた「サマーキャンプ」。平成24年と25年の2年間で計20回実施しました。(そのほか保育園建設支援、屋内遊び場の設置などを実施)

医療支援



石巻・気仙沼医療圏再構築(再建支援)

石巻赤十字病院を除く、ほぼすべての医療インフラが壊滅した宮城県の上三陸沿岸部。被災した公立病院などの再建を支援するとともに、将来への備えとして「災害医療総合センター」を石巻赤十字病院内に整備しました。

- | | |
|-----------------|------------------------|
| ●改修・再建を支援した医療機関 | ●南三陸病院・総合ケアセンター南三陸(仮設) |
| ●石巻市夜間急患センター | ●気仙沼市立本吉病院 |
| ●女川町地域医療センター | ●南三陸町診療所 |

災害対応能力強化



防災倉庫配置支援 27市町村432カ所

将来の大規模災害を見据え、避難所設置に役立つ機材を備えた防災倉庫を沿岸部の被災地域に寄贈しました。簡易トイレや浄水器、発電機、太陽光蓄電装置、避難所用パーテーションなどが備蓄されています。(そのほか日赤の災害対応能力強化などを実施)

原発事故対応



食品放射能測定器の寄贈 109台 9万43人

福島第一原発の事故により広がった食品の放射能汚染不安。こうした不安に応えるため、福島県などの自治体に食品放射能測定器を寄贈。市民から持ち込まれた農作物や飲料水の検査に役立てられました。(そのほか甲状腺モニターの寄贈、赤十字原子力災害情報センター <http://ndrc.jrc.or.jp/> の設置などを実施)

東日本大震災義援金 被災自治体を通じて全額を被災者にお届けしています

被災15都道府県を対象に平成26年3月31日まで受け付けた義援金は、*3731億2079万円余りが寄せられ、全額を市町村を通じて被災者にお届けしました。皆さまのご協力にあらためて感謝申あげます。(※日赤と中央共同募金を合わせた金額。手数料等をいたくことなく全額を被災者にお届けしています)

岩手、宮城、福島、茨城の4県を対象にした義援金は平成29年3月末まで受け付けを継続します。引き続き温かいご支援をお寄せください。

※窓口で通帳払い込みをされた場合、手数料は免除されます。
※インターネットでの寄付や銀行振込済みでも受け付け可能です。詳しくは、日赤ホームページ (<http://www.jrc.or.jp/contribute/help/>, 27331/) をご覧ください。



箱石さんは岩手県赤十字ノルディックウォーキング奉仕団が開く定期的ウォーキングなどに週2回参加、「汗をかかぬ実感がありません。体調も良くなりました。初めに会った友達に会えなれぬのもうれしです」

避難した真山には、10人くらいの方がいましたが、緊張感はありませんでした。近所のお嬢さんも家へ戻ってしまっ。その直後です。川が反対方向に流れ始め、海から波が押し寄せました。自宅が流されたのはあつという間。

避難所となった町民会館は大広間には雑魚寝。座布団2枚の上で寝返りもできない状態です。その後、別の避難所を経て、仮設住宅に移ったのは3カ月目くらいでした。ようやく自分だけの空間が持てたのでホッとしましたね。赤十字からの家電セットの支援も本当に助かりました。でも、先行きの不安が頭から離れずありません。血圧が180くらいまで上がってしまったこともあります。

災害公営住宅に入れたのは2年半程前。趣味の粘土ラワや水泳、盛岡や三に住む娘に会いに行ったりと忙しく過ごしています。その一方で、営業していた酒屋の仕事を失いましたし、私はいった何をやっていいか、という虚しさもあるんです。

最近では地震が増えきているのも気が悪いですが、高い堤防を造っていますが、自然の力にはかなわないんじゃないかと思っています。



「震災後、半年くらいは町が全く知らない人同士が、あつするようになったんです。そんなところが地域にあるのが大切ですよ」(長寿さん・白)

忘れてならないのは、各地から集まってくれたボランティアさんたちの存在です。工場の手付けや缶詰の振り出しなどを手伝ってくれました。その味を大勢の方が支持してくれています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。



学校再開を復興の第一歩に

久之浜は福島第一原発から約30キロ、地震と津波で学校が大きな被害を受けたわけではなかったんですが、地域には津波で犠牲になった方が多くいましたし、特に放射線の不安は深刻でした。

子どもたちはバスで片道一時間半をかけていわき市の中央にある学校まで通うことになりました。でも、その学校

放射線の影響で学校が使えなくなり、離れた地域での間借り生活。久之浜第一小学校の子どもたちが本来の学校に戻れたのは震災から7か月後の10月11日です。1年生にとっては初めて入る自分たちの学校。元気に廊下を走り回っていた姿が目につきました。僕もうれしかったです。

子どもと避難している間、子どもの姿と声が町から消えました。大人たちには大変なシヨクだったんです。ですから、学校再開後は、地域の皆さんがよく学校を見に来るようになりました。子どもたちの元気な姿に勇気をもらっていました。

子どもが「今日学校が楽しかった」と家庭で話せば親が元気になる。そうして大人が元気になれば、家庭も職場も明るくなり、町全体、福島全体が元気になる。学校を通じて子どもたちは未来の夢を育み、それが地域の未来につながるんだと心から思っています。

子どもが「今日学校が楽しかった」と家庭で話せば親が元気になる。そうして大人が元気になれば、家庭も職場も明るくなり、町全体、福島全体が元気になる。学校を通じて子どもたちは未来の夢を育み、それが地域の未来につながるんだと心から思っています。

あの日、あの時

久之浜 小六年 遠藤秀華

「あれから四年が経ち、周りの環境も良くなりました。安心しました。学校でも授業にのめり込んでいて、周りの人も親切にされて、学校を毎日楽しく通っています。久之浜は、まだ少し荒れている場所もあるけど、最近では、復旧作業をする場所が増えてきて、どんどん綺麗になっていって、さかか復旧作業が進んでいるので、津波は来てほしくないです。そして、将来は、久之浜も森や林が「はい、はい」と思っている、平和に暮らしたいです。」

山の上から見た津波に流される街

地震の時私は、營んでいた酒屋の中。すぐに近所の人と向いの山に逃げました。でも、まさか家が流されるなんて思っていませんでしたので、財布は置きっぱなし。飼っていた2匹の猫もついに残したままです。

避難した真山には、10人くらいの方がいましたが、緊張感はありませんでした。近所のお嬢さんも家へ戻ってしまっ。その直後です。川が反対方向に流れ始め、海から波が押し寄せました。自宅が流されたのはあつという間。

避難所となった町民会館は大広間には雑魚寝。座布団2枚の上で寝返りもできない状態です。その後、別の避難所を経て、仮設住宅に移ったのは3カ月目くらいでした。ようやく自分だけの空間が持てたのでホッとしましたね。赤十字からの家電セットの支援も本当に助かりました。でも、先行きの不安が頭から離れずありません。血圧が180くらいまで上がってしまったこともあります。

災害公営住宅に入れたのは2年半程前。趣味の粘土ラワや水泳、盛岡や三に住む娘に会いに行ったりと忙しく過ごしています。その一方で、営業していた酒屋の仕事

宮城県

忘れたくないのは、各地から集まってくれたボランティアさんたちの存在です。工場の手付けや缶詰の振り出しなどを手伝ってくれました。その味を大勢の方が支持してくれています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

子どもたちの元気が、地域の元気をつくっています

いわき市立好間第一小学校校長 松本光司さん

放射線の影響で学校が使えなくなり、離れた地域での間借り生活。久之浜第一小学校の子どもたちが本来の学校に戻れたのは震災から7か月後の10月11日です。1年生にとっては初めて入る自分たちの学校。元気に廊下を走り回っていた姿が目につきました。僕もうれしかったです。

子どもと避難している間、子どもの姿と声が町から消えました。大人たちには大変なシヨクだったんです。ですから、学校再開後は、地域の皆さんがよく学校を見に来るようになりました。子どもたちの元気な姿に勇気をもらっていました。

子どもが「今日学校が楽しかった」と家庭で話せば親が元気になる。そうして大人が元気になれば、家庭も職場も明るくなり、町全体、福島全体が元気になる。学校を通じて子どもたちは未来の夢を育み、それが地域の未来につながるんだと心から思っています。

あの日、あの時

久之浜 小六年 遠藤秀華

「あれから四年が経ち、周りの環境も良くなりました。安心しました。学校でも授業にのめり込んでいて、周りの人も親切にされて、学校を毎日楽しく通っています。久之浜は、まだ少し荒れている場所もあるけど、最近では、復旧作業をする場所が増えてきて、どんどん綺麗になっていって、さかか復旧作業が進んでいるので、津波は来てほしくないです。そして、将来は、久之浜も森や林が「はい、はい」と思っている、平和に暮らしたいです。」

「どっしりしたら山の高さの津波がでできるのか?」

岩手町の災害公営住宅で暮らす 箱石千鶴子さん

今でも不思議です。どうしたら津波が山と同じ高さになるんだろう、なんで家が流されてしまったんだろう。夢の中の出来事だ。たまたまも思えるんですが、たまに真黒い波に襲われる感覚がよみがえることもあるんです。

家が流され、壊れていく時はバリバリとすごい音がするんです。本当に怖かったですね。そうしているうちに「ここまで(水が)来るぞ」と叫び声が上がって。雪が降る中をみんなで必死に上へ登っていき、たどり着いた神社から見えたのは、街全部が流れていく様子。自宅に戻ってしまったお嬢さんは後日遺体で見つかりました。あの時、なんで強く止めなかったのか。ずっと後悔しています。

避難所となった町民会館は大広間には雑魚寝。座布団2枚の上で寝返りもできない状態です。その後、別の避難所を経て、仮設住宅に移ったのは3カ月目くらいでした。ようやく自分だけの空間が持てたのでホッとしましたね。赤十字からの家電セットの支援も本当に助かりました。でも、先行きの不安が頭から離れずありません。血圧が180くらいまで上がってしまったこともあります。

災害公営住宅に入れたのは2年半程前。趣味の粘土ラワや水泳、盛岡や三に住む娘に会いに行ったりと忙しく過ごしています。その一方で、営業していた酒屋の仕事

岩手県

「あのとき芽生えた助け合いの気持ちを忘れない」

木村長勢さん 副社長 木村隆之さん

石巻湾に面した水産加工団地にある会社は、津波で建物も設備も全壊しました。出荷前の缶詰80万缶は流された。大和煮缶詰の形をした高さ10メートルのタンクも300メートル流されて、津波が引いた後、道の真ん中に転がっている有様でした。

当時従業員は約80人でしたが、地震の揺れの後に自宅に戻った1人を津波で失いました。また、災害を機に退職された方もいます。それでも40人以上の社員が残っていました。彼らの生活を守っていく。絶対解雇はしなと誓いました。見通しはなかつた。ただ、やれることからやっていく。残った社員にまず頑張ってもらったのが、流された缶詰を泥の中から掘り出す作業。二つと洗って、即売会などという形でお客様にお渡ししました。震災前に内定を出していた2人の高校生も5月に入社し、積極的に自分たちの判断で動き、会社の将来を考える勉強会を開いたりもしました。頼もしかったです。

忘れてならないのは、各地から集まってくれたボランティアさんたちの存在です。工場の手付けや缶詰の振り出しなどを手伝ってくれました。その味を大勢の方が支持してくれています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

福島県

子どもたちの元気が、地域の元気をつくっています

いわき市立好間第一小学校校長 松本光司さん

放射線の影響で学校が使えなくなり、離れた地域での間借り生活。久之浜第一小学校の子どもたちが本来の学校に戻れたのは震災から7か月後の10月11日です。1年生にとっては初めて入る自分たちの学校。元気に廊下を走り回っていた姿が目につきました。僕もうれしかったです。

子どもと避難している間、子どもの姿と声が町から消えました。大人たちには大変なシヨクだったんです。ですから、学校再開後は、地域の皆さんがよく学校を見に来るようになりました。子どもたちの元気な姿に勇気をもらっていました。

子どもが「今日学校が楽しかった」と家庭で話せば親が元気になる。そうして大人が元気になれば、家庭も職場も明るくなり、町全体、福島全体が元気になる。学校を通じて子どもたちは未来の夢を育み、それが地域の未来につながるんだと心から思っています。

あの日、あの時

久之浜 小六年 遠藤秀華

「あれから四年が経ち、周りの環境も良くなりました。安心しました。学校でも授業にのめり込んでいて、周りの人も親切にされて、学校を毎日楽しく通っています。久之浜は、まだ少し荒れている場所もあるけど、最近では、復旧作業をする場所が増えてきて、どんどん綺麗になっていって、さかか復旧作業が進んでいるので、津波は来てほしくないです。そして、将来は、久之浜も森や林が「はい、はい」と思っている、平和に暮らしたいです。」



「今でも地震がある。大震災から5年経って、夜中や早くには着替えずにトイレを開くのが習慣になりました」

岩手県

「あのとき芽生えた助け合いの気持ちを忘れない」

木村長勢さん 副社長 木村隆之さん

石巻湾に面した水産加工団地にある会社は、津波で建物も設備も全壊しました。出荷前の缶詰80万缶は流された。大和煮缶詰の形をした高さ10メートルのタンクも300メートル流されて、津波が引いた後、道の真ん中に転がっている有様でした。

当時従業員は約80人でしたが、地震の揺れの後に自宅に戻った1人を津波で失いました。また、災害を機に退職された方もいます。それでも40人以上の社員が残っていました。彼らの生活を守っていく。絶対解雇はしなと誓いました。見通しはなかつた。ただ、やれることからやっていく。残った社員にまず頑張ってもらったのが、流された缶詰を泥の中から掘り出す作業。二つと洗って、即売会などという形でお客様にお渡ししました。震災前に内定を出していた2人の高校生も5月に入社し、積極的に自分たちの判断で動き、会社の将来を考える勉強会を開いたりもしました。頼もしかったです。

忘れてならないのは、各地から集まってくれたボランティアさんたちの存在です。工場の手付けや缶詰の振り出しなどを手伝ってくれました。その味を大勢の方が支持してくれています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

福島県

子どもたちの元気が、地域の元気をつくっています

いわき市立好間第一小学校校長 松本光司さん

放射線の影響で学校が使えなくなり、離れた地域での間借り生活。久之浜第一小学校の子どもたちが本来の学校に戻れたのは震災から7か月後の10月11日です。1年生にとっては初めて入る自分たちの学校。元気に廊下を走り回っていた姿が目につきました。僕もうれしかったです。

子どもと避難している間、子どもの姿と声が町から消えました。大人たちには大変なシヨクだったんです。ですから、学校再開後は、地域の皆さんがよく学校を見に来るようになりました。子どもたちの元気な姿に勇気をもらっていました。

子どもが「今日学校が楽しかった」と家庭で話せば親が元気になる。そうして大人が元気になれば、家庭も職場も明るくなり、町全体、福島全体が元気になる。学校を通じて子どもたちは未来の夢を育み、それが地域の未来につながるんだと心から思っています。

あの日、あの時

久之浜 小六年 遠藤秀華

「あれから四年が経ち、周りの環境も良くなりました。安心しました。学校でも授業にのめり込んでいて、周りの人も親切にされて、学校を毎日楽しく通っています。久之浜は、まだ少し荒れている場所もあるけど、最近では、復旧作業をする場所が増えてきて、どんどん綺麗になっていって、さかか復旧作業が進んでいるので、津波は来てほしくないです。そして、将来は、久之浜も森や林が「はい、はい」と思っている、平和に暮らしたいです。」



「今でも地震がある。大震災から5年経って、夜中や早くには着替えずにトイレを開くのが習慣になりました」

岩手県

「あのとき芽生えた助け合いの気持ちを忘れない」

木村長勢さん 副社長 木村隆之さん

石巻湾に面した水産加工団地にある会社は、津波で建物も設備も全壊しました。出荷前の缶詰80万缶は流された。大和煮缶詰の形をした高さ10メートルのタンクも300メートル流されて、津波が引いた後、道の真ん中に転がっている有様でした。

当時従業員は約80人でしたが、地震の揺れの後に自宅に戻った1人を津波で失いました。また、災害を機に退職された方もいます。それでも40人以上の社員が残っていました。彼らの生活を守っていく。絶対解雇はしなと誓いました。見通しはなかつた。ただ、やれることからやっていく。残った社員にまず頑張ってもらったのが、流された缶詰を泥の中から掘り出す作業。二つと洗って、即売会などという形でお客様にお渡ししました。震災前に内定を出していた2人の高校生も5月に入社し、積極的に自分たちの判断で動き、会社の将来を考える勉強会を開いたりもしました。頼もしかったです。

忘れてならないのは、各地から集まってくれたボランティアさんたちの存在です。工場の手付けや缶詰の振り出しなどを手伝ってくれました。その味を大勢の方が支持してくれています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

水産加工業は人手不足などの問題もありますが、もつと石巻や水産加工の魅力アピールしたいと考えています。

福島県

子どもたちの元気が、地域の元気をつくっています

いわき市立好間第一小学校校長 松本光司さん

放射線の影響で学校が使えなくなり、離れた地域での間借り生活。久之浜第一小学校の子どもたちが本来の学校に戻れたのは震災から7か月後の10月11日です。1年生にとっては初めて入る自分たちの学校。元気に廊下を走り回っていた姿が目につきました。僕もうれしかったです。

子どもと避難している間、子どもの姿と声が町から消えました。大人たちには大変なシヨクだったんです。ですから、学校再開後は、地域の皆さんがよく学校を見に来るようになりました。子どもたちの元気な姿に勇気をもらっていました。

子どもが「今日学校が楽しかった」と家庭で話せば親が元気になる。そうして大人が元気になれば、家庭も職場も明るくなり、町全体、福島全体が元気になる。学校を通じて子どもたちは未来の夢を育み、それが地域の未来につながるんだと心から思っています。

あの日、あの時

久之浜 小六年 遠藤秀華

「あれから四年が経ち、周りの環境も良くなりました。安心しました。学校でも授業にのめり込んでいて、周りの人も親切にされて、学校を毎日楽しく通っています。久之浜は、まだ少し荒れている場所もあるけど、最近では、復旧作業をする場所が増えてきて、どんどん綺麗になっていって、さかか復旧作業が進んでいるので、津波は来てほしくないです。そして、将来は、久之浜も森や林が「はい、はい」と思っている、平和に暮らしたいです。」



美味しく食べて元気に 採れたて果実を被災地へ

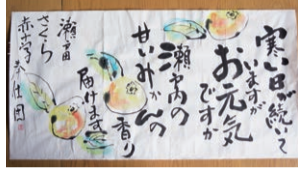


広島県

尾道市瀬戸田町さくら赤十字奉仕団が1月18日、瀬戸田産のかんきつ類を東日本大震災で被災された方に贈りました。

尾道市瀬戸田町にある、かんきつ類のテーマパーク「シトラパーク瀬戸田」の農園で、奉仕団員が約150キログラムを収穫。その後、宮城県支部を通じて、東日本大震災被災地の一つ多賀城市で、採れたての果実を配布しました。

奉仕団委員長杉原八重子さんは、「おいしく召し上がってもらい、少しでも元気になってほしい」と話しています。



団員みんなで楽しくワイワイと収穫。温かなメッセージも添えて届けられました

真冬の災害から身を守れ! 避難所設営などを演習



北海道

厳冬期の災害時にどのように身を守るかを考える演習が1月16、17日、北見市の日本赤十字北海道看護大学で行われ、行政機関の防災担当者など約100人が参加。朝の気温が-23℃を記録する中、大学の体育館での避難所設営や宿泊、エンジンを切った車内で寒さを防ぐ方法などについて、学びました。

6回目となった今回は、停電で暖房が使えない想定の下、段ボールベッドでの就寝訓練を初めて実施。ベッド上で寝袋にくるまって過ごした参加者からは「寒さを感じず快適」の声が出ました。また屋外では、猛吹雪で立ち往生した車の中で温かい食事や飲みものを取る効果などを含め安全な過ごし方の検証も行われました。



段ボールベッドは東日本大震災を機に開発。昨年9月の常総市の避難所でも活用されました

女子小学生バンド「TANNS」が献血応援ソング



新潟県

新潟県加茂市の女子小学生5人組バンド「TANNS(ターンズ)」が歌う献血応援ソング「なにげない日常」(作詞shu、作曲はんだすなお)のCDが1月31日、新潟県赤十字血液センターに贈られました。

TANNSは小学6年生の5人が2年前に結成。「なにげない日常」は病気と闘う人たちに思いを寄せながら、日常の中にある幸せや愛を歌ったバラードです。昨年からの市内のライブイベントなどで披露されてきました。「献血啓発に役立ててほしい」との思いからCDを寄贈。制作費を除いたCDの収益金は日本赤十字社に寄付される予定となっています。



5人はもうすぐ小学校卒業。中学生になってからの活躍に期待です!

輸血でいのちをつないだ高校生のドキュメンタリー公開



神奈川県

小学校4年生の時に脳腫瘍を患い、輸血でいのちをつないだ高原弥詞さん(高校2年生)。自身の経験を踏まえ「新たな献血の輪を広げたい」と献血推進活動に取り組む高原さんの姿を追ったドキュメンタリー映像を神奈川県赤十字血液センターのホームページ上で公開中です。

映像はテレビ神奈川の制作で、今年1月に放映されたもの。治療で10回の輸血を受けた高原さんが、世界献血者デーで「命のリレー よろしくお祈りします!」と献血を呼び掛ける姿や友人を献血ルームに案内する様子が描かれています。

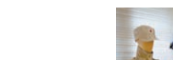


世界献血者デーで献血を呼び掛ける高原さん(中央)



退院後の運動会はビリだったけど気持ち良かった!

赤十字の歴史学ぶ広報プラザオープン



愛媛県



来場者からは「赤十字の歴史について知るいい機会になって良かった」などの感想が寄せられています

愛媛県支部は1月29日、県庁内にあった支部事務所を87年ぶりに松山市岩崎町に移転。それに伴い、事務所1階に赤十字の歴史などを紹介する広報プラザを新たに設置しました。プラザ内には日清・日露戦争時における救護活動の記録や当時使用した救護資材、東日本大震災の際の救護活動の様子などを展示しています。

新春の徳島駅伝の安心をサポート



徳島県



医療班の車両には、AED(自動体外式除細動器)や応急手当セットを搭載(車両2台目)

1月4日から3日間、県内各市町村から集った選手が全43区間257.3キロのコースを駆け抜けた徳島駅伝で、徳島県支部の医療班が安全を見守りました。転倒によるけがや寒さによる体調不良などに備えて、医療班は車で追走。今年は気候にも恵まれ、大きなけがや体調を崩す選手を出すことなく、大会は無事終了しました。

区主催の緊急医療救護所研修会に参加



東京都



大田区では、大規模災害時に区内20カ所に「緊急医療救護所」が設置される予定です

大田区主催の第1回緊急医療救護所研修会が1月30日、大森赤十字病院で開催され、区職員や区内の医師、薬剤師、柔道整復師、同院職員など43人が参加。区の災害医療コーディネーターを務める同院の松本賢芳医療社会事業部長を講師に、災害医療の基本やトリアージの方法など緊急医療救護所の運営に必要な知識と技術を学びました。

1・17「防災とボランティアの日」各地でイベント



兵庫県 / 山口県 / 栃木県



阪神・淡路大震災(平成7年1月17日)では、全国から多くのボランティアが支援に駆けつけ「ボランティア元年」ともいわれました。この経緯を踏まえて制定された「防災とボランティアの日」。今年の1月17日にもさまざまなイベントが行われました。

阪神・淡路大震災で大きな被害を受けた地域を歩く「ひょうごメモリアルウォーク」が行われた兵庫県。休憩所に指定された県支部では、赤十字防災ボランティアと職員が味噌汁の炊き出しを行い、参加者に提供しました。神戸市中央区のなぎさ公園で開かれた「交流ひろば」でも、赤十字奉仕団のメンバーが訓練を兼ねた炊き出しを行い、出来上がった豚汁を「赤十字まごころサービス」として来場者に振る舞いました。

山口県支部は、県赤十字防災奉仕団の研修会として、「こころのケア研修」を支部内で開催しました。こころのケアは、被災者や支援者のストレスを理解・軽減していくために、救護要員やボランティア

が実施する被災地での救護活動です。今回の研修では、山口赤十字病院のこころのケア指導者が被災された方への接し方を説明。またストレス緩和に役立つリラクゼーションの方法などを実技で学びました。

栃木県支部は、赤十字防災ボランティア養成研修会、赤十字防災ボランティア・フォローアップ研修会を開催。昨年9月の台風18号による豪雨災害を振り返り、対応を検証しました。



なぎさ公園では、中学生も協力して血液製剤の搬送訓練(兵庫)



肩や背中に優しく触れ、スキンシップを図るリラクゼーション(山口)



実技として大型テント設営の訓練も実施(栃木)

東日本大震災復興支援事業

日赤×ANA バレンタイン特別企画 健康教室と手作りチョコで笑顔の交流



初めて作ったチョコボール。きれいにできました！

日本赤十字社とANAグループは2月14日、福島県郡山市にある南一丁目応急仮設住宅内で「バレンタイン特別企画～健康教室&バレンタインチョコレート作り」を開催。「チョコ作りなんて初めてだったから、とても楽しかった」「体操も気持ちよかった」など会場は参加者の賑やかな笑い声に包まれました。



お姉さんと楽しく話しながらの昼食

今年で3回目となるこの企画は、福島県内の仮設住宅に暮らす被災者の健康維持とコミュニティー活性化などが目的です。今回は川内村から避難している方を中心に、ANAグループ社員のボランティア、川内村赤十字奉仕団員など70人余りが参加し、健康体操やチョコレート作りなどに挑戦しました。

ANAグループのボランティア参加者からは「仮設から転居すればコミュニティーがまた崩れる心配があることなどを参加者の皆さんからお聞きし、復興には時間がかかることを実感しました」などの感想も出されました。

ANAグループのボランティア参加者からは「仮設から転居すればコミュニティーがまた崩れる心配があることなどを参加者の皆さんからお聞きし、復興には時間がかかることを実感しました」などの感想も出されました。

Voice & プレゼント

Voice

赤十字 NEWSにお寄せいただきました読者の皆さまの声をお届けします。

「被爆70年 守るべきいのちと尊厳」(12月号掲載) 原爆に立ち向かった医師・都築正男先生の情熱と原爆症の究明に命をかけた生涯に感動いたしました。

—内澤義宜さん(青森県)

救急法競技会の話、興味深いです。救急法講習を受講してから時間がたち、忘れてるのが現状。年に一度でも復習の場が必要だと実感します。いざという時の備えが必要ですね。

—及川義教さん(北海道)

プレゼント

日本赤十字国際人道研究センター 所長 井上忠男さんの著書「戦争と国際人道法」を3名様にプレゼントいたします。以下の項目を明記のうえ、郵送・FAX・メールでご応募ください。



- ①お名前(匿名をご希望の方は、その旨もご記入ください)
- ②郵便番号・ご住所 ③電話番号 ④年齢
- ⑤赤十字 NEWS3月号を手にされた場所(例/献血ルーム)
- ⑥3月号で良かった記事、興味深かった記事はどれですか?(いくつでも)
 - Ⓐ 今月の出会い
 - Ⓑ 被災地と向き合い続ける NHKディレクター 佐野広記さん
 - Ⓒ 愛の献血車「宝くじ号」贈呈式
 - Ⓓ 私たちは、忘れない。未来につなげる復興支援プロジェクト
 - Ⓔ 健康豆知識 大人のアトピー ⑥ 全国から続々被災地応援メッセージ
 - ⑦ 特集 東日本大震災から5年 もう一度心に刻みたい あの日の記憶、そして今
 - Ⓕ エリアニュース
 - ① 日赤×ANA 東日本大震災復興支援事業 バレンタイン特別企画
 - ② 常任理事会開催報告 ④ Voice&プレゼント
 - ① 中東3カ年計画 むびとに笑顔を取り戻す支援をいま
 - ④ 被爆70年 守るべきいのちと尊厳(最終回)
- ⑦赤十字NEWSのご感想、扱ってほしいテーマ、その他 Voice(読者の声)への投稿もお待ちしています。

応募先 ● 郵送/〒105-8521 東京都港区芝大門1-1-3 日本赤十字社 企画広報室 赤十字 NEWS3月号プレゼント係 FAX/03-3432-5507 メール/koho@jrc.or.jp(件名「赤十字 NEWS3月号プレゼント係」)

応募締切 ● 3月28日(月)必着 ※当選者の発表はプレゼントの発送をもって代えさせていただきます。

伊勢赤十字病院が最先端の心臓手術「TAVI」成功！



伊勢赤十字病院は1月29日、大動脈弁狭窄症*の最新治療「経カテーテル的大動脈弁置換術(TAVI)」を行いました。昨年10月にTAVIを実施できる施設として、関連学会協議会の認定を受けてから初の手術となります。



厳しい基準が設けられている施設認定を受けたのは同院が三重県下初。日赤病院内でも名古屋第一、徳島に続いて3施設目

TAVIは、大腿部の動脈(または肋骨の間)を切開して心臓の先端)からカテーテルを挿入し、大動脈弁の位置に人工弁を取り付ける手術。人工心臓を使用せず、心臓停止しないため、身体的負担が比較的小さく、術後の回復も早くなることが期待されます。今回の患者は83歳の女性で、外科的人工弁置換術ではリスクが高いと判断されたことからTAVIを実施。術後経過は良好で、同院では今後も有効な治療法として積極的に実施していく方針です。*高齢化のためなどで心臓の弁の開きが狭くなり、十分な血液を全身に送り出しにくくなる疾患

「マインドマップ」で目指せ！ 学習力アップ



情報が脳内でどう処理されていくのかを視覚的に描くことで、学習効果を高める思考ツール「マインドマップ」。京都第二赤十字看護専門学校が、この思考ツールを活用した講義や実習に力を入れています。



全教員がマインドマップを教えらる看護学校は同校が全国で第一号

マインドマップに同校が取り組み始めたのは2009年。教員全員が認定資格を目指し、このほど全員が合格しました。昨年7月には「学ぶ力がつく！マインドマップで看護教育研究会」を立ち上げ、他の看護学校の教員と共に活用法の研究も進めています。



マインドマップ

仮設住宅の高齢者対象に「赤十字にここ健康教室」



福島県支部は1月27日、福島市内の南矢野目応急仮設住宅の集会所で「赤十字にここ健康教室」を開催しました。



毛布がガウンに早変わり！

同教室は、東日本大震災と原発事故の影響で避難生活を続けている高齢者が対象。慣れない生活環境の下、外出の機会が減った高齢者の中には生活不活発病の発症を心配する人が少なくありません。こうした病気や介護を予防するとともに、家族離ればなれの避難生活やコミュニティー崩壊に伴う孤立・孤独を軽減していくのが目的です。毎年度、25回程度の予定で東日本大震災復興支援事業として開催しています。



体を動かした後は、フラワーアレンジメントにも挑戦です

参加者は、赤十字奉仕団のメンバーと一緒にストレッチ体操で体を動かしたり、毛布を用いたガウンやホットタオルの作り方、AED(自動体外式除細動器)を使った心肺蘇生の方法などを実習。参加者からは「赤十字のボランティアにも協力したいね」と元氣な感想が出されました。

常任理事会開催報告

平成28年2月19日、本社において平成27年度第10回の常任理事会が開催されました。

- 1 社員制度の見直し及び日本赤十字社定款の一部変更について
 - 2 医療事業推進本部制の導入及び関係規則の改正について
 - 3 本社組織の見直し及び関係規則の改正について
 - 4 役員選出、平成28年度事業計画及び収支予算について
- 審議の結果、これらの案件については、原案のとおり本年3月18日開催の理事会及び第87回代議員会に付議することが了承されました。
- また、予算の補正にかかる1月分の社長専決事項の決定状況について報告しました。

シリア
レバノン

WORLD NEWS

中東3カ年計画(2015~2017年) 人びとに笑顔を取り戻す支援をいま

昨年9月、日本赤十字社はレバノンの首都ベイルートに中東・北アフリカ地域代表事務局(日赤代表事務局)を開設しました。日赤は中東への人道支援を最優先課題に掲げ、今年度から「中東3カ年計画」に取り組んでいます。日赤代表事務局は、支援をスムーズに実施し、支援を必要とする一人ひとりに確実に届け、難民受け入れ周辺諸国と日本との「架け橋」となる役割を担っています。

日赤は現地の各赤十字社・赤新月社と協力し、保健医療支援、こころのケア、水・衛生、生計支援などを実施しています。これらの支援を人びとに確実に届けるため、日赤から派遣されているのが、日赤代表事務局の五十嵐真希さんです。

日赤代表事務局とはいっても、国際赤十字・赤新月社連盟(連盟)中近東地域事務所の一角に机を置いているだけで、要員は五十嵐さん一人。日赤の支援事業の管理に加え、日本政府からの拠出金を元に実施している連盟事業の調整も行っているのです。忙しく走り回る日々です。「紛争の影響を受けている方の苦勞を目の当たりにして、少しでも力になろうと私も必死です。彼らは、



ザーレ、コブ・エリアスの避難住居区

生活環境の良い場所を求めて毎日計り知れない努力をし、すさまじい生命力を感じます」と五十嵐さんは話します。

日赤が支援する水・衛生事業

五十嵐さんは先日、レバノン北東部、ベッカー県中央のザーレ、コブ・エリアスにある非公式*避難住居区を訪問しました。ここに、シリア北部の都市アレppoから避難してきた83家族、390人が暮らしています。そのうち223人が子どもたちです。

*レバノンは難民条約に非加盟で、公式な難民キャンプの設立ができないため、非公式難民住居区と呼ばれる難民のテント村があちこちにあります。

住居区では日赤の支援により、レバノン赤十字社と住民が協働して道に砂利を敷き、テントを設置しました。また、トイレの建設、井戸掘削とタンクの設置、下水処理用の設備、衛生教育など、水と衛生環境の改善も進められました。

食事は1日1回の日も

難民テントに生活する姉妹、ザハレ・ムス

タファちゃん(13)とイブティッサム・ムスタファちゃん(12)もアレppoからの避難民です。両親と他の6人の兄弟と一緒に2年前、避難してきました。

薄着で裸足の2人に五十嵐さんが「寒くない?」と尋ねると、「慣れてるから大丈夫!」と答えるものの、「テントの中は寒い、狭い部屋に家族10人で住むのは辛い。お父さんもお母さんも忙しいし、アレppoにいた頃とは違って、面倒を見てくれる近所の人も少ないの」とイブティッサムちゃん。ザハレちゃんも「お金にも困っていて、食事は1日1回か2回」とうつむいてしまいました。

子どもたちの願いは「学校」

非公式避難住居区の子供たちが通う学校は、小学校低学年以下の子供たち向けの仮設学校だけで、小学校高学年のための学校はありません。レバノンの学校に行くこともできません。



ザハレちゃん(左)とイブティッサムちゃん(中央)の話を聞く五十嵐さん(右)。「お母さんの心臓が悪いから、心臓の治療ができるお医者さんになりたい」と語ります

ザハレちゃんといブティッサムちゃん姉妹も避難してきてからの2年間、学校に通えない状況です。五十嵐さんが学校や勉強のことを質問すると2人は身を乗り出し、「ここには学校がないの。学校に行きたい。勉強がしたい。どうやったら、勉強できるの?」と質問攻めです。子どもたちにとって、学校に通えないこと、勉強ができないことは、何よりも辛いことなのです。

凍えるように寒いテント生活。コンクリートの床の上を裸足のまま、小さい兄弟たちの世話をしながら、勉強が出来るようになる日を夢んでいるザハレちゃんといブティッサムちゃん、そして大勢の子供たち。「この子たちに寄り添いながら、赤十字ができる限りの支援を続けていく必要と責任を痛感しています」と五十嵐さんは語りました。

人的貢献を中心とした中東支援を計画

日本赤十字社国際部 堀乙彦部長

シリア紛争が始まってから既に5年が経過しました。中東の混乱はシリアに止まらず、イラク、パレスチナ、イエメンにも広まっており、多くの難民を受け入れているレバノン、ヨルダン、トルコなどの周辺国にも大きな影響を与えています。さらに移民として、多くの人が危険を冒し、いのちを失って祖国を逃れ、ヨーロッパ諸国にも押し寄せています。今、中東は第二次大戦後最大の人道危機に直面しています。

日本赤十字社では、中東支援3カ年計画を策定し、この人道危機に計画的・包括的に取り組んでいます。具体的には、レバノンに代表事務局を置き、資金・物資の援助を実施。今後は、保健・医療など日赤の得意とする分野での人的貢献を中心に、赤十字のネットワークを生かした支援を展開していく計画です。

1350万人の人道支援ニーズ シリア人道危機

内戦で25万人が亡くなり、100万人以上が負傷したシリア。家屋や学校、医療施設、文化的建造物は破壊され、国内で避難生活を送っているのは660万人、国外に避難している難民数は460万人にのぼります(2016年2月、国連OCHA調べ)。

水、食糧、電気、医療、教育などへのアクセスは制限され、200万人もの子どもたちは学校で勉強する機会を奪われています。8割のシリア人が職を失い、人口の半数近い1350万人が人道支援を必要としています。

このような状況下で、赤十字は特定の勢力側につかない中立の機関として、懸命の支援を続けています。2月17日には、支援が入りにくいダマスカス近郊のマダヤなどに、シリア赤新月社がトラック100台分の支援物資を届けました。

日赤は、救援金を募集しています。皆さまの温かいご支援をお待ちしています。

受付期間 平成28年3月31日(木)まで

受付口座 ゆうちょ銀行・郵便局 口座番号「00110-2-5606」/口座名義「日本赤十字社」

*振替用紙の通信欄に「中東人道危機」とご記入ください。

*銀行振り込みなどによるご支援も受け付けています。詳しくはホームページ(<http://www.jrc.or.jp/contribute/help/cat751/>)をご覧ください。



物資を届けるシリア赤新月社のトラック

被爆70年 守るべきいのちと尊厳

〜核兵器のない世界へ〜

最終回

被爆70年の先へ ~変える力は私たちの記憶の中に~

国際赤十字は2011年、世界の赤十字社が集う国際会議で、核兵器廃絶を世界に呼び掛ける決議を採択しました。「もし核兵器が使用された場合、その犠牲者を誰も救うことはできない」という人道的観点によるものです。広島、長崎への原爆投下から70年。本コラムはこれまで、核兵器が人間のいのちと尊厳をどう脅かしてきたのか、そして人びとは核兵器廃絶にどう立ち向かったのかを、赤十字の歴史から紐解いてきました。その中には、原爆投下の直後から自らの危険も顧みずに救護に奔走した、あまたの赤十字の医師や看護師たちの声が刻まれていました。そのどれもが、赤十字の決議の主張を裏付けるものでした。

一方、現実には、世界に1万5000発以上の核兵器が存在し、個々の威力は平均して広島型原爆の20倍から30倍に相当するものです。ある科学的試算によると、それが100発程度使用されれば、煙や粉塵により地表に降り注ぐ日光が遮られ、気温の急激な低下によって世界中の農業が危機に瀕することになります。その結果、10億もの人びとが食糧難に陥り、さらには深刻なレベルでオゾン層が破壊されることで、人命のみならず地球環境そのものが取り返しのつかないダメージを受けるといわれています。

今日、核軍縮に向けた国際社会の歩みは遅々とした状態です。核兵器の問題を取り扱う2015年4月の核不拡散条約の締約国会議は、核軍縮

に向けた今後の行動計画について合意に達することができず決裂。核戦争などでの人類滅亡を午前0時になぞらえる「終末時計」(米科学誌が発表)は、2016年現在、3分前を指しています。これは1980年代の米ソ間の軍拡競争時代と同じ針の位置で、近年になり核兵器使用の危機が極めて高まっていることを示しています。

しかし他方で良い兆しも見えます。2012年にスイスやノルウェーなど16カ国が提案した「核兵器の非人道性に関する共同声明」への賛同国は、2015年4月には159カ国に達しており、国連では核兵器禁止のための条約制定に向けた検討も始まっています。被爆者の平均年齢が80歳を超える中、このうねりを後押しする意味でも、今以上に、ヒロシマ、ナガサキ、そして世界中のヒバクシャの声に耳を澄ませ、広めるべき時はありません。

「敗戦から遠ざかるにつれて、人々の記憶から、戦争の悲惨さや原爆の地獄絵図が次第に薄れていくように見えた。だが一方では、人々の目に触

れない場所で、原爆の後遺症に悩みながら、世の偏見を逃れるために被爆者であることを隠し、ひっそりと罪を犯した者のように生きている人たちがいた…(中略)…私は思った。死んでいった人たちのために、今、苦しみつつ生きている人たちのために、そして、これから生きようとする人たちのために、私たちの戦争と原爆、そして平和を語りたい(雪永まさ彥編『きのご雲 日赤従軍看護婦の手記』1984年、オール出版)



核兵器廃絶の願いが込められた折鶴